

SMONに対する高圧酸素療法(才4報)

岩手医科大学医学部高圧タンク室 鈴木 一 池田嘉光 島崎吉夫
渡辺幹夫 金谷春之 新津勝宏
斎藤春雄

私達は既に、昭和42年12月からSMONに対して高圧酸素療法を行ない、昭和43年以来各学会などでその成績を発表し、本学会に於ても才4回、才6回總會で同じく成績を発表した。本疾患は厚生省のSMON調査研究協議会により病因が漸く解明を見た所で、キノホルム説が有力となった。従つて診断も必しも容易でなく、同協議会の臨床診断指針、橋教授、杉山教授らの診断基準が用いられる。従つて治療法も一定しない現状で、臨床的には早期にステロイド剤、各種ビタミン剤の十分な使用、ニコチン酸、ATP大量点滴療法と用いるも、神経症状、運動障害はかなり難治性で、症状の残存、再燃、固定化を来し、これら薬剤のみでは症状の改善、消退を期待し得ず、又従來の理学的リハビリテーションを併用するも満足すべき結果を得られない症例が多い。これら従來の療法では除去限度と考えられる、難治性の慢性症例を主たる対象として、常用の方法で高圧酸素療法(AT A 17, 90分、マスク法により純酸素供給、連日、隔日、又は週2回加圧)を実施し上記主要症状である、しびれ感、痛み、知覚異常、歩行障害などの臨床症状の改善を見て居り、その成果は昭和47年2月の前記SMON調査研究協議会治療予後部会でも検討され一応SMON治療指針に採録され、諸施設で追試を見て居るが、症例が追加されたので、知り得た事項を加え、治療の予後、再加圧、回数の実などに触れて報告する。その間持記すべき副作用はなかつた。対象例は65例(男23, 女42)で、年齢分布はスライドの如く全国傾向と同じく30~40才台の♀に多く、既往症は腹部疾患、特に虫鉋切除が最多である。症例はスライドの如く各々の圧瘻機内でSMONと診断され、各種の薬剤療法、理学的療法を6月~3年以上送けたにも拘らず、主要症状の知覚異常、運動障害の改善が得られなかつた症例を、前述の診断基準に基づいて改めて確認して治療対象例とした。初発症状、主要症状、診断確定までの期間、OHP開始迄の期間、経過圧瘻機内はスライドの如くで、診断の困難性、難治性が改めてうかがわれた。慢性固定化症例と他の治療経験例を対象して選擇した理由は、治療法としてのOHPの効果と、客観

的に判定し價値づけたいという考慮に基くものである。次にOHPの効果とスライドにより症例について報告する。特に今回は治療終了後の推移、年齢の問題、加圧回数と効果、再加圧の問題について申述へる。表1、表2の如く、M.H例の如く経過し本年本産を来し症状の変化、変化を見せ例もあり、その様な症例は3例有る。又治療終了後の状態としては、症例

	R.Y. 66才♀	M.H. 27才♀	T.T. 43才♀	S.I. 56才♀	Y.H. 67才♀
SMON、診断の 経緯(病名) 経過(年)期間	関東労災 4年6ヵ月	東北大 山形内科 2年	東北大 山形内科 4年	中伊豆温泉 病院 2.5年	新潟大 脳神経内科 8年
確定後の医療機 関名(診療内容)	関東労災 R.O.P.P. 内科	東北大 山形内科	東北大 山形内科	中伊豆温泉 病院	新潟大 脳神経内科
経過圧瘻機内	+	+	+	+	+
痛	+	+	+	+	+
しびれ	+	+	+	+	+
歩行障害	+	+	+	+	+
知覚異常	+	+	+	+	+
運動障害	+	+	+	+	+
固定化	+	+	+	+	+
経過圧瘻機内	+	+	+	+	+
決定したOHP 療法(期間)	6年	4年	8年	3年	1年

表1

